



市章

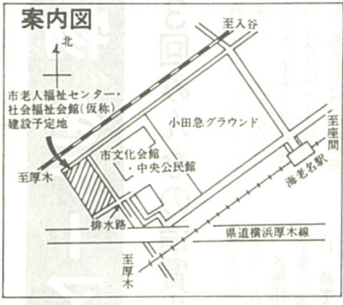
広報えびな

発行・海老名市役所・海老名市国分155/編集・秘書広報課/電話・31-2111(代)/〒243

世帯と人口

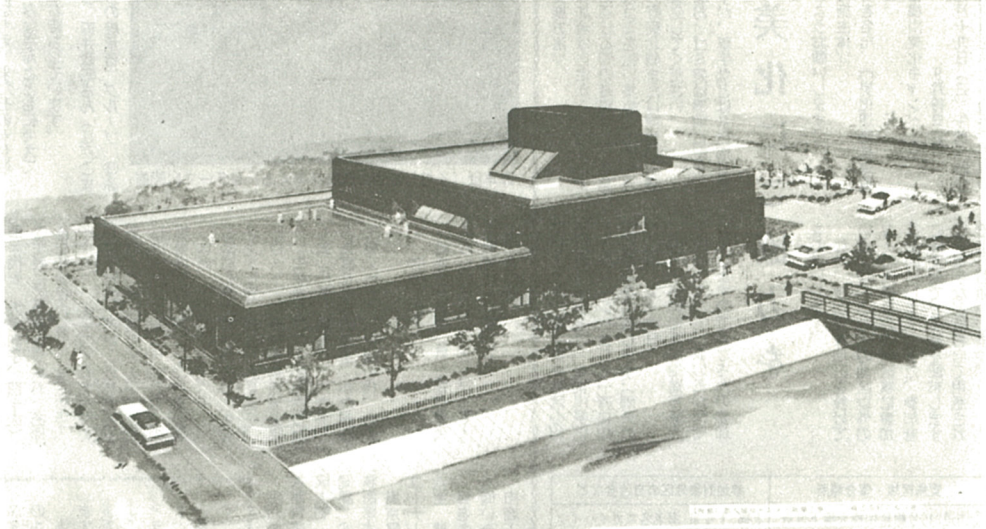
昭和57年8月1日現在	
世帯	25,624世帯 (-31)
人口	84,836人 (+69)
男	43,526人
女	41,310人

毎月1日・15日発行



市老人福祉センター・社会福祉会館(仮称)完成予定図

完成予定は 来年3月



市中心部に「ふれあい施設」

市老人福祉センター・社会福祉会館(仮称)を建設

老人福祉などの中核的施設となる市老人福祉センター・社会福祉会館(仮称)の建設計画が進展し、今月中旬に着工の運びとなりました。建設費約四億円をかけ、建設場所は、市文化会館駐車場の西側(図)で、鉄筋コンクリート造り二階建て、延べ建築面積千五百八十六平方メートルの建物になる計画です。完成は来年三月、開所は来年六月の見込みです。

福祉活動の拠点

市老人福祉センター・社会福祉会館(仮称)が建設される場所は、上郷区大田切四七四番地で、市文化会館駐車場の西側に当たり、海老名駅から歩いて数分の交通至便の地です。

建物は、一階(建築面積千三百三十八・四七平方メートル)が老人福祉センターとして、二階(同四百四十七・五三平方メートル)が社会福祉会館として利用されることになっており、当然のことながら、お年寄りや障害者、子供などが建物を利用しやすくするため市が定めている「身体障害者等の利用を考慮した施設整備要綱」に基づいて設計されています。

また、二階建てという低層建築であるお年寄りや障害者の利用を考慮したのですが、延べ建築面積では老人福祉センターの建物としては県下最大の規模を誇ります。

老人福祉センター

この建物を使って行われる予定の事業やそのための細部の施設内容に目を向けると、まず一階で実施される事業の中心となるものは、市保健医学協議会のご協力で行われる予定のお年寄りの健康診査、健康相談、それにお年寄りの失われた機能を回復する機能回復訓練です。

健康診査のために診察室が、健康相談のために健康相談室が設けられ、特に機能回復訓練のための機能回復訓練室は、厚木市七沢にある県七沢リハビリテーションセンター内の訓練室

敬老のつどい

市では、昨年から設定された福祉強調月間(八月十五日〜九月三十日)中の行事のひとつとして、九月十日(金)午後二時から市文化会館で「敬老のつどい」を開催します。

市内の七十五歳以上のお年寄りを招待し、永年市の発展に貢献されたお年寄りたちの長寿を市民こそ祝福します。お年寄りを持つご家庭のみならず、当日は民生委員の協力を得て市のバスを使い、お年寄りを送迎しますが、可能であれば自家用車での送迎を希望してあげてください。

老人福祉週間

九月十五日「敬老の日」から二十一日までは「老人福祉週間」です。

「敬老の日」「老人福祉週間」とも、多年にわたって社会に尽くしてきたお年寄りに敬意とその長寿を祝うもので、広く国民がお年寄りの福祉についての関心・理解を深め、お年寄り自身も自らの生活向上への意欲を高める期間です。

ぜひお宅でもの機会にお年寄りのことについて話し合ってみてください。

趣味の作品展

九月二十二日(水)、二十三日(木)両日も午前九時から午後四時まで、中新田の総合福祉センターで「趣味の作品展」が開催されます。

これも福祉強調月間中の行事のひとつで、昭和五十四年度からは教養娯楽室、図書室、茶室があり、加えて先の集会所兼運動指導室の大広間もそうした目的にも利用されます。

社会福祉会館

一階は、社会福祉会館として各種の福祉活動の拠点となる場所です。

録音室は、視力障害を持つ方のためにいろいろなものの録音が行えるよう録音防止が施されています。

団体交流室は、老クラブやボランティアグループ、その他各種団体が相互交流し、ふれあいの場となるように設計されています。

視聴覚室は、ビデオ採録、映画上映などが行えるようになっています。

休養室は、茶室と障子から成り、休憩やいろいろな趣味の教室などに使用できます。

その他、福祉資料室、研修室、二つの会議室などがあります。

一階の屋上部分に人工芝を張って造られる公式試合可能なゲートボール場は、屋上設置されるという点で非常に新しく、県下でも初めてのものです。

期待しています

山崎 栄さん
(河原口、七十七歳)



そういう施設ができるのは大いにありがたいですね。

4万人が会場に集合!

第7回えびなふるさとまつり

七回目を迎え、夏の風物詩としてすっかりおなじみになった「えびなふるさとまつり」が八月七日・八日の両日、小田急グラウンドで開かれました。今年も、延べ四万人もの来場があり、また、会場を練り歩くこしも十五基に増えるなど盛りあがりを見せた二日間でした。このふるさとまつりの模様を市広報モニターの辻野慎子さん(上郷)に取材していただきました。

また掲載した写真の一部は、同じく市広報モニターの三戸見桂一さん(東柏ヶ谷)が撮影したものです。

ふるさとに人々の和が

暑い梅雨明けと雨の訪れで、照りつける暑さを知らずに迎えた八月十日の午後、ふるさとまつりが行われていた小田急グラウンドを訪れた。みこしやゆしのせわめきの中に足をふみ入れた途端、熱気が伝わってくる。さししたず



オセロ



▲女みこしでワッショイ 市広報モニター 三戸見桂一さん撮影



▲みんな輪になり盆おどり



▲スイカ割り大会



カラオケ大会



▲呼吸びったり はやし連 市広報モニター 三戸見桂一さん撮影

ち並んでいる。無料サービスでは竹馬あそび、フクロフタバ、消防車・起震車のコーナーでは、起震車で大地震の揺れを体験し、ふだん見ることができない消防車の運転席などは子供にとってとても魅力的で、子供たちの長い列ができていた。

その他、幼稚園児の鼓笛隊演奏やゴキブリパフォーマンス、カラオケ大会もあったが、親子で家族ぐるみの目撃客が多く、子供より大人の方が夢中になってしまい、親子・親子がしの放送もしばしばあった。

私も年初めてふるさとまつりをのぞいてみたが、海老名市が第二のふるさととして、大人の間でも子供の間に段々自分

の町にしよう、自分たちの祭りに参加しようという気持ちが出てきているような気がした。

よその土地から移り住んだ人々も、相模川の水で蓮湯を使ったり人もみんな一緒になって住みやすい土地にしよう、たのしみ海老名にしようという気分が少しずつできてきているのだなあと感じた。

周囲に何もなないあのグラウンドで、日中からカラオケに大勢集まってきている人々を見て、ああこれはいいことだなあと思った。夜、狭い部屋で隣近所から迷惑がられながら歌うより青空の下で自分の声に聞きほれながら公然と拍手を浴びつづけることができるのは、とても通じて人々の和が生まれるのだなと思った。

今までも他人事のような感じではありましたが、何だか恥ずかしくなるような気持ちでもありません。

(市広報モニター 辻野慎子記)

声の広場

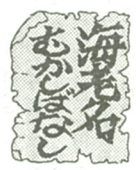
投稿は住所、氏名を忘れずに〒214三 海老名市国分一五五海老名市役所秘書広報課まで

成人学級に参加して

「海老名の自然を訪ねて」申し込み者五十一人中、全回出席十三人、五回以上出席三十五人という盛況のうち、成人学級「海老名の自然を訪ねて」は七月二十八日に終わりました。

横浜から海老名へ移り住んで二年、豊かな緑にうれしくはなつたものの、自然に対する無知を思い知らされていた矢先、広報の呼びかけを見つけた。

(この記事、定員を超えた場合は抽選とありましたが、待って暮らせと通知がこないため電話



徳本行者

この人は、当時、紀伊国(現在の和歌山県)日高郡志賀谷、久志村の農家に生まれ(宝暦八年、二十七歳で出家し、千原川村の山中に草庵を結んで念仏七年に及び、さらに萩原村で草庵を結んで三年、海士郡塩津の山中に二年、その後、摂津国茨村の住吉山に三年修行して、比叡山に上り布教の許しを受け、これが彼の活動の始まる。

晩年江戸に下り、関東から信州にも布教した。今、彼の残したものに徳本上人の歌念仏といふのがあり。六十一首の歌念仏の行為の規範を教えたもので、一例をあげると

「わがこを人が言ふとて腹立つな、われもかかげては人のこといふ」

といった調子のものである。

また「ただ一すじに南無阿彌陀仏と申せばたたらに真理の光



屋外で野鳥の調査(中央公民館付近)

先生は既知れぬ雑草知識と巧みな話術で、私たちをすっかり魅了しておしまいにまりました。その昔、富士箱根の爆発で火山灰が一面に降り積もってきた関東一平野の豊かな土壌、そこを流れる相模川の度々なる変化によって海老名の地形が形成されて行ったこと、つまり河原段丘が自然堤防の役目を果たし、台地と水田地帯はつきり分かれ、従って植物も全く違う特徴を持つこと。

土地の潜在能力を知るためには人手の加わらない所を見るのがよいと、駅近相模橋山九里の土手の一部、相模川の川原、有徳神社の森などに足をのびたいと申したいと聞き、市広報モニター 吉沢順子(柏ヶ谷)



村の名はすでに磨滅し...

十数ヶ村の民衆に与えた影響は大きかったと推察される。「わがいはり草履の上に笠の下杖を杖とすみぞのそで」「住む」と「墨」とを懸け言葉にしてあるが、笠一杖で里から里へ行脚(あんぎゃ)する生涯をおが住家とした徳本の面目を示す歌である。

徳本(徳本)の碑文「南無阿彌陀佛」は彼の草庵である。徳本については「徳本行者語」(甲子夜話「武江年表」などを参考にした。地名は江戸時代、池田正一郎氏「関分」から寄稿されたもの)。

訂正:八月一日号の第48話「高木清秀の文中「長久寺は長久寺」に、「終止」は「終始」に訂正します。